

2024年11月24日 主日礼拝 降誕前 第5主日

説教題：「**耳を傾ける人生**」

聖書箇所：ルカによる福音書16章19 - 31節 (141頁)

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 14 交読詩編：詩編99編1 - 9節 (108頁)

讚美歌：83/505 (歩ませてください) /449 (千歳の岩よ) /529 (主よ、わが身を) /27

「今週の聖句」〔アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』〕 (ルカ伝16:31)

「牧師室の窓」 「礼拝の朝の雪かき息弾む恩師を想い半世紀経つ」

「石炭のストーブ燃ゆる音遙か恩師語れる礼拝の日々」

(1)皆様、おはようございます。早いもので11月も最後の週となります。教会の暦では、降誕前の期間が5週間目を迎えて、来週の主日からは待降節・アドベントに入ります。

○11月終わりの日曜日は日本基督教団では収穫感謝日であり、加えて、謝恩日と定めています。秋の時期に行なわれる収穫感謝の祝いは各国各地域によって異なりますが、人間の、人類の歴史にとっては生存に係わる重要な行事であります。先月10月に発表されました今年のノーベル経済学賞は「繁栄と貧困の起源」についての研究です。私たちは繁栄の中にいるのでしょうか、或いは、貧困へと向かっているのでしょうか。その本は文庫本2冊(計2,200円)、本屋さんで売っていますので、今日の聖書箇所に関連してお読みになられると宜しいかとお勧めします。

○日本基督教団では本日を「謝恩日」とも定めています。隠退した牧師やそのご遺族の方々の老後の生活のために年金制度を設置しておりまして、年金掛金では賄いきれない不足分への補填として各教会や個人が献金を献げるための記憶の記念日としています。私は先月まで日本基督教団年金局で東京教区北支区代表として理事会の一員でありましたが、任期が長くなったことから、申し出て、10月で退任しました。これからも献金を献げる一人として、長い信徒時代に従事した外国為替や資金運用の実務、年金制度に係わる知識にて助言する一人として、お役に立てればと思っています。

○本日の週報裏面の「牧師室の窓」に50数年前の礼拝の一場面をスナップ写真の様に記しておきました。雪の季節が年間で5か月間あり、日曜日は礼拝が始まる1時間半前には雪かきを始めて教会学校、そして礼拝と進みました。信仰生活の浅い私を牧師は厳しくも温かく教えていただきました。昨年6月にご遺族である奥様にお会いし、牧師の写真にも御礼を申し上げました。50年が経過しての再会でした。母教会と、奥様と、奥様の所属教会に献金を献げる機会を得たことを感謝しました。

(2)本日の聖書箇所は16章の19節から始まります。参考として付けられている小見出しには「金持ちとラザロ」と書かれています。この譬え話はルカ伝15章から続く譬え話の延長線上にありますが、併し、大きく異なっています。何が違うのかと言いますと、ルカ伝15章の「見失った羊」の羊飼いのにも、「無くした銀貨」の女性にも、また「放蕩息子」の登場人物にも、名前が記されていません。今日の聖書箇所に登場する金持ちにさえも名前が記されていません。併し、この貧しい主人公だけには「ラザロ」と言う名前が記されているのです。つまり、譬え話が譬え話ではなく、具体的な名前を持つ人物について、イエス様はお話をされているのです。ラザロと言う名前はギリシア語に翻訳された名前ですが、もともとのヘブル語では「エレアザル」と言ひまして、「神は助けられた」と言う意味です。…何故、今日のこの聖書箇所の譬え話の登場人物のみに名前が出ているのか、それはラザロと言う名前が「神は助けられた」と言うことを、イエス様ははっきりとお示しになられたのです。

きょうの聖書箇所を読み始める前に、もう一つ気に掛かることがありますので、確認をしておきましょう。それは29節と31節に書かれている「モーセと預言者」と言う言葉です。以前にも申し上げましたが、同じ言葉、似た様な言葉が2回以上出てきましたならば要注意です。皆様の生活の中でも同じです。例えば、自分自身の状況の中で、或いは、家族の中での健康状況で同じことが2回起きれば要注意です。何らかの対応が必要となります。3回起きれば、3回と言うのは、その真意は「たくさん」という意味です。

…話を元に戻しますと、「モーセと預言者」とよく似た言葉が、今日の聖書箇所のすぐ前、直前の16節には、「律法と預言者」と書かれています。

(3)では、きょうの聖書箇所の手前の14節～18節には何と書かれているかと言いますと、モーセの律法の教えを大切にしている人々、つまり、「ファリサイ派の人々」が、実際には律法の教えを守ってはいないことをイエス様は明らかにされているのです。16節に書かれている「律法と預言者」と言う言葉は旧約聖書全体を示しています。旧約聖書を土台として「神の国の福音」が16節の表現にあるように「力づくで(つまり、無理矢理に)」付け加えられるのではなく、両者は連続しているとイエス様はファリサイ派の人々に教えておられるのです。その旧約聖書と神の国が告げ知らされた狭間、つまり、境界線上にある人々はどの様に考えて行動すれば良いのかが今日の聖書箇所の主題・テーマになっています。

(4)きょうの聖書箇所の登場人物は、ラザロと金持ちとアブラハムです。アブラハムとは主なる神のことです。場面は2幕構成になっており、第1幕はラザロと金持ちが生きている時の場面であり、第2幕はこの二人が亡くなった後の場面です。第

1幕では金持ちとラザロの生活状況が書かれています。生活状況の最も基本となる「衣・食・住」について書かれています。始めに「衣」が示されるのは、「衣」が人間としての尊厳を表わしているからであり、「暖を取る」ことは生命の保持に直結することに他ならないからです。

金持ちは衣食住に全く困ることがないばかりか贅沢に暮らしていました。一方、ラザロは極貧の状態にありました。この場面を注意深く読むと、金持ちはラザロに対して暴力的に扱っていたのではなく、何がしかの食べ物を与えていたものと推測できます。併し、この金持ちは、今日の聖書箇所の手前、14節に書かれている「金(かね)に執着するファリサイ派の人々」のことを示しています。彼らはこの金持ちと同じ様に、貧しい人々に対しては幾分かの恵みを与えていたでしょう。「金(かね)に執着するファリサイ派の人々」は、自分たちこそがアブラハムの子孫であり、死後においても神のもとに行くことができると信じていました。逆に言えば、貧しい人々が死んだ後に神のもとへ行くことが出来るなどとは全く露ほどにも思っていないでしょう。

(5)今日の主人公であるラザロと言う人の名前の意味は何でありましたでしょうか。そうです。ヘブル語では「エレアザル」、その意味は「神は助けられた」であります。22節に「(16:22)やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。」と書かれています。ここには「宴席にいる」と翻訳されていますが、ギリシア語の原文には「宴席」と言う言葉はありません。そうではなくて、「アブラハムの懐(ふところ)にいる」が正確な翻訳です。何故ならば、ルカ伝13章30節には、「アブラハムのいる神の国では宴会の席に着く」と書かれていることを参照して翻訳されたものと考えられます。序で乍ら、その13章30節には「そこでは(つまり、神の国の宴会の席では)後(あと)の人で先になる者があり、先の人で後(あと)になる者がある。」と書かれています。

23節を見てみましょう。〔(16:23)そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。〕死後の世界がこん

なはずではないと思いき苦しんでいたこの金持ちは思いもよらない状況を目にしたのです。ラザロがアブラハムの懐(ふところ)にいる、楽しそうにしているのが見えたのです。

(6)金持ちは声を大にして、アブラハムに対して助けを求めますが、ほんの僅かな願いさえも叶えられませんでした。25節〔(16:25)しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもたえ苦しむのだ。〕…ここで注意をしなければなりません。この25節は、良い行ないが良い結果を生む、報われる、一方、悪い行ないが悪い結果を生むという、因果応報をこの聖書箇所が示しているではありません。考えてみれば、因果応報の考え方、教えは、様々な民族の教えや言い伝えに見ることができます。では、イエス様は何を言おうとされているのでしょうか。この違いを知るキーワードは先程の「モーセと預言者」です。29節31節に書かれています。或いは16節にある「律法と預言者」がキーワードです。もう少しよく見てみましょう。29節には〔(16:29)しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』〕そして、31節には〔(16:31)アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』〕〕

(7)ここには「耳を傾けるがよい」「耳を傾けないのなら」とイエス様は語り掛けておられます。「律法と預言者」を大切にしているとしていた「ファリサイ派の人々」が、全く正反対の状態であることが明らかになったのです。では、舞台を私たちの生活に置き換えるとどうなるでしょうか。「耳を傾ける」とはどの様なことであるのでしょうか。それは「見失った羊」「無くした銀貨」「放蕩息子」の譬えに書かれている「悔い改める」こと、神のもとに立ち帰る悔い改め、神と共に生きることであります。そして、日常生活においては「不正な管理人」の記事に書かれている様に「ごく小さな事に忠実な者」として、「本当に価値あるものを任せる」と主なる神から託される生活を送り、そこに人生の価値を置くことであると思われまます。

ルカ福音書第15章はルカ伝の山場と以前に申し上げましたが、まさに山場であり、16章はその山に続く山脈(やまなみ)と言えましょう。繰り返し読んで「耳を傾ける」人生を歩んで参りましょう。

・・・お祈りします。

主なるキリストの神様。私たちは降誕前の日々を過ごしています。来週には、待降節／アドベントを迎えます。日々の生活に追われていますが、聖書の御言葉によって養われていることに感謝いたします。御言葉に耳を傾け、悔い改め、神のもとに立ち帰り、日々を過ごして参りたいと願っています。戦争が起きている地に住む人々に、自然災害で困難の中にある人々に、生活の中で困っている人々に、平安と慰めがありますように。教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、み恵みがありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 **アーメン**

〔**新共同訳**ルカによる福音書(16:19)「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。/(16:20)この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、/(16:21)その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。/(16:22)やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。/

(16:23)そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。/(16:24)そこで、大声で言った。『父アブラハムよ、わたしを憐れんでください。ラザロをよこして、指先を水に浸し、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』/(16:25)しかし、アブラハムは言った。『子よ、思い出してみるがよい。お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はもだえ苦しむのだ。/(16:26)そればかりか、わたしたちとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方に越えて来ることもできない。』/(16:27)金持ちは言った。『父よ、ではお願いします。わたしの父親の家にラザロを遣わしてください。/(16:28)わたしには兄弟が五人います。あの者たちまで、こんな苦しい場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』/(16:29)しかし、アブラハムは言った。『お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。』/(16:30)金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。』/(16:31)アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」}